

■毎年夏がくると思い出すのは、30代の頃、アメリカで1カ月ほどホームステイしたことである。場所は西海岸にあるワシントン州、テレビドラマに出てきた「大草原の小さな家」をほうふつするような片田舎で、隣人の家は数百円離れていた。

到着して数日後の日曜日、「ヨシ、さあ教会へ行くよ。君は私の家族の一員だからね」と連れて行かれたのは、村の中心にある小さな建物だった。総勢300人は超えていただろうか。司教の説教と賛美歌が終わると突然、ホストファミリーが「わが家には家族が1人増えた。日本人ですが。ヨシ、スピーチしなさい」と言った。

急なことでびっくりしたが、貧弱な英語で自己紹介や村の印象を話した。最後に「この村が好きです」と言うと皆が大きな拍手をしてくれ

た。

その後、シルクハットが回ってきた。その中に皆が紙幣やコインを入れていた。「ヨシも入れなさい」と言われたのでポケットにあつた100円紙幣を入れた。ファミリーは「このお金は教会の運営資金になるんだよ」と教えてくれた。そうか、教会はこのような寄付金で成り立っているのか、と理解できた。

シルクハットの思い出

心にある小さな建物だった。総勢300人は超えていただろうか。司教の説教と賛美歌が終わると突然、ホストファミリーが「わが家には家族が1人増えた。日本人ですが。ヨシ、スピーチしなさい」と言った。

それから数回行き、少ないながら紙幣をシルクハットに入れた。今でも「あのお金は教会のためになったかな」「あの教会は今もあるのだろうか」と思いをはせる。

今、身近な所でさまざまな寄付行為が行われている。何かを支えるために寄付金を出すのは大事なことのひとつかと思う昨今である。

点差

こうさてん

(安曇野市穂高、荻原義重、78歳)